

終章

本論文の目的は、日本語教育においてこれまであまり注目されることのなかったオノマトペに光をあて、豊かな表現力を持つ日本語オノマトペの教育を支援することであった。そのために、まず日本語に特徴的であると言われるオノマトペとはどのような語群なのか、また私たちはオノマトペを実際にどのように使っているのか、オノマトペの学習や指導にはどのような方策が考えられるのかということをも明らかにし、その上で、オノマトペの教育を支援するためのリソースを提供しようと考えた。本論文においてこの目的がどのように達成されたか、また今後に残された課題は何かということをも、本論文を終えるにあたって以下にまとめる。

第1章では、オノマトペに関する先行研究の知見をまとめつつ、日本語オノマトペを様々な側面から眺めてみた。しかしここで、オノマトペに関するあらゆる先行研究を吟味し、日本語オノマトペのすべてについて網羅的に記述できたわけではない。また、そのことが本論文で筆者が目指したことでもない。第1章で筆者が目指したことは、日本語教育におけるオノマトペの位置付けを確かなものにするために、まず、オノマトペとは何かという問題に取り組むことであった。そして、オノマトペの定義と分類、音象徴性、音韻・形態的特徴、統語的特徴、またオノマトペの語彙化と他の語との境界の問題について考察した。この考察の過程で、オノマトペがたしかに「閉じた系」として、他の語と弁別されるべきははっきりした特徴を持った語群であることを改めて確認することができた。また、この考察から、オノマトペとはどこからどこまでを指すのかというオノマトペ語彙の範疇について、あくまで教育という立場から、本論文におけるオノマトペの定義を示すことができたと思う。

しかし、オノマトペや他の語群においても、また語彙に限らずどのような言語現象においても同様であると思うが、その範疇を定め定義付けすることは容易ではない。それは、すべての言語現象は本来連続体として捉えられるべきものであり、どこかで線引きできるようなものではないからであると考えられる。よって、本論文の第1章において日本語オノマトペを教育という観点から定義付けしたが、定義付けの目的や視点の違いによっては、日本語オノマトペをどのような語として捉えるか、またそれをどのように定義付けるかとい

うこともまた異なってくる可能性は残されていると考える。今後の課題としたい。

第2章では、日本語オノマトペが既存の辞書においてどのように扱われているかということを見るために、調査と考察を行なった。学習者が教科書や教材、または日常の言語生活の中でオノマトペに出会い、その意味や用法を知りたいと思った時、あるいは教師が学習者にオノマトペの意味や用法を説明したり、学習者の質問に答えたりしようと思った時、最も手近な方法は手元にある辞書で確認することであろう。辞書はそのような意味で、オノマトペ学習や指導の環境に欠かせないものの一つであると考えたからである。

調査の対象としたのは、国語辞典、擬音語・擬態語辞典、外国人のための日本語学習辞典である。ここでの調査の目的は二つあった。まず、それぞれの辞書にどんなオノマトペが見出し語として選定されているかということ。二つ目は、それらの辞書で、オノマトペの意味や用法がどのように記述されているか、またその記述は、オノマトペの学習や指導にとって必要かつ十分なものになっているかということである。

調査の結果、数種類の辞書において見出し語として採録されている語には、かなり相違があることがわかった。オノマトペが、その範疇を定めることの難しい語群として日本語に存在するという事実が、辞書の調査からも浮かびあがった。二点目の意味・用法の記述についての調査と考察は、学習の早い段階で出会う基本的な語や、学習や指導に困難を覚えることの多い類義語や多義語について行った。調査と考察の結果、日本語を母語としない学習者にとって、既存の辞書による意味記述や用例だけでは、オノマトペの意味・用法を理解し、運用していくことは難しいのではないかという結論に達した。

第3章では、日本語オノマトペが、実際の言語生活においてどのように用いられているかという、オノマトペ使用の実態を把握するために、各種言語資料と日本語初級・中級教科書について調査を行った。序章でも述べた通り、日常の言語生活の様々な場面において多用されているオノマトペが、従来の日本語教育においてその重要性に見合う扱いを受けてきたとは考えにくい。本章での調査とそれに基づく考察を通して、オノマトペが実際どのように使われているか、また日本語教科書のどの段階においてどのようなオノマトペが取り扱われているかを知ること、オノマトペ教育の方策への手掛かりが得られるのではないかと考えたからである。

調査の対象としたのは、新聞記事、雑誌記事、シナリオ集、漫画という各種言語資料と

初級・中級の日本語教科書である。それらの資料や教科書に見られるオノマトペにはどのようなものがあるか、また複数の教科書に扱われている語、各種言語資料において高頻度で用いられる語は何かなどの調査を行った。これらの調査とそれに基づく考察は、日本語教育においてオノマトペがどのように学習されまた指導されるものかを知る上で、前提となる大切な情報であったと考える。今後も、同様の調査をより広い範囲で行っていききたい。特に、オノマトペは書き言葉ではなく、日常の話し言葉においてその使用が頻繁に見られることから、今回は調査の対象とできなかった自然談話資料やテレビ番組における談話資料等についても、調査を行っていききたいと考える。日本語母語話者による日常会話コーパスの出現が待たれるところである。

第4章では、これまでの日本語教育において、決して十分な学習や指導がされていなかったと思われるオノマトペの教育について、様々な観点から考察した。始めに、日本語教育におけるオノマトペ指導、また基本オノマトペ選定に関する先行研究を概観し、次に、日本語教師や学習者にアンケートやインタビュー調査を行った。この調査の目的は、学習者や教師がオノマトペをどのように捉えているか、また、これまでどのように学習・指導してきたか、そしてオノマトペ教育に対してどのように考えているかを知ることであった。

次に、従来行われてきた語彙指導の方法論とそこで用いられる教材や指導法について吟味した。そして、これまでオノマトペ教育が十分に行われてこなかったと考えられるのはなぜか、なぜ今オノマトペ教育が必要だと考えるのかという、オノマトペ教育の基本的な考え方と表現教育としてのオノマトペ指導の必要性を論じた。また、オノマトペの音象徴性、音韻・形態的特徴を学習と指導にどう援用できるかという観点からも考察した。

オノマトペの統語的特徴については、日本語中・上級教科書とオーセンティックな教材を題材とし、オノマトペが文中でどのような役割を果たすのか、それらは文中において必須の要素となっているのかという観点から調査と考察を行った。また、オノマトペは、言うまでもなく日本語母語話者の感性や身体感覚、すなわち五感と密接に関係している語彙である。そこで、多義であるオノマトペが複数の意味を持つにいたった過程と多義のネットワークを、認知言語学の観点から明らかにすることを試みた。

以上、第4章では、オノマトペの持つ様々な言語学的特性と、オノマトペ教育への方向性を明らかにすることができたと考える。特に、学習者と教師を対象に行った調査は、対象人数も限られたものであったが、オノマトペ教育に対する学習者や教師の生の声を聞く

ことができ、本研究の主眼である第5章、第6章に向けて非常に貴重な示唆が得られたと考える。今後は、学習者のオノマトペの学習状況やその習得過程なども研究の対象としていきたい。

第5章と、続く第6章は、本論文において筆者が目指した日本語教育のための「基本オノマトペ」の選定とそのリソース化である。さて、第4章までで、日本語オノマトペについてその定義の問題から使用の実態にいたるまで、また日本語教育におけるオノマトペ学習と指導の方策についても、様々な方向から調査・考察し論じてきたわけであるが、オノマトペの教育については、学習のごく初期の段階から中級、上級さらに超上級にいたるまで、語彙教育として多種多様な方策が考えられるところである。しかし、本論文において、すべての学習段階での教育について、また語彙教育として考え得るあらゆる方策について論じ、またそのための具体的な成果を提示することは不可能であると考えた。よって本論文では、筆者が、オノマトペ教育において今、最も必要であると考えたところの<比較的早い段階からのオノマトペ教育>の方策として、日本語教育のための「基本オノマトペ」の選定とそのリソース化を試みることにした。

第5章では、始めに「基本語彙」とは何か、日本語教育においてどのような語を「基本語彙」と考えるのかという点についていくつかの先行研究を概観し、本論文における考え方を述べた。また、8種の基本語彙先行研究の文献を資料とし、複数の文献に重複して選定されているオノマトペを、本論文における「基本オノマトペ」選定のための基礎資料とした。次に、日本語教育における「基本オノマトペ」とはどのようなものかという、本論における基本オノマトペ選定に向けての考え方と選定のプロセスを述べた。その考え方とプロセスに従って日本語教育のための「基本オノマトペ」70語を選定した。

この70語は、あくまで日本語教育における学習・指導のために、基本的なオノマトペをリソース化するという目的で選定したものである。従って、この70語を中級レベルまでにすべて学習・指導することが望ましいという意味ではもちろんない。同時に、この70語以外のオノマトペを学習・指導することを妨げるものでもない。それは、特に中級レベル以上になると、語彙の学習の範囲や習得の過程は、個々の学習者の学習目的や学習環境によっても大きく異なってくることが想像されるからである。そのため、学習語彙のシラバスを定めることは、実際には大変困難なことであるわけだが、本論文では敢えてそのことに挑戦し、ここに試案として提示したわけである。今後は、この70語という語数、また

その選定プロセスが適正なものであったかを再度検討し、基本オノマトペ選定に向けての考え方とそのプロセスをより精緻化していきたいと考える。

本論文の最終章である第6章では、第5章で選定した「基本オノマトペ」70語を、日本語学習者と教師のオノマトペ教育を支援する目的でリソース化し、本論文の成果として提示した。リソース化の方法は、以下の3つの段階に分けて行った。

(1) オノマトペの「用法」の提示

簡潔な文例によって、各オノマトペが文中でどのように用いられるのかという統語的情報をすべて示す。これによって、様々な用法を持つオノマトペについても、実際にそれがどのように使われるのかということを一覧にして見せることができると考えた。

(2) オノマトペが用いられる「文例」とその「意味」の記述

語の意味や用法の理解、またその語を実際に使用できるようにするには、その語が用いられる「文脈」を示すことが重要であると考え、これまでの辞典や教材に見られたような短文レベルの文例ではなく、「文脈」を伴ったより長い文例を示すこととした。そして、その「文例」における語の意味を解説する形で、「意味」を記述した。この「文例」と「意味」の記述には、『コウビルド英語学習辞典』(1990)に用いられている記述法を援用した。それは、語の意味を、これまでの辞典に見られたように単に他の語で言い換えたり説明したりするのではなく、その語が実際に文の中で使われている様を示すことによって、前後に来る語や使われる場面・状況、すなわち「文脈」を示すことができるという方法である。

(3) 日常的な場面における「会話例」の提示

リソース化の最後の段階は、「会話例」の提示である。オノマトペは、本来話し言葉においてより多く用いられる語彙である。そこで、日常の様々な場面において交わされると考えられる短い会話例を創作し、オノマトペが日常生活の中で実際どのように使われているのかを示すこととした。また、会話においては、〈だれが〉〈だれと〉〈いつ〉〈どこで〉〈何について〉〈どんなことを〉話しているのかという、背景となる情報も大切であると考え、具体的な登場人物や場面・状況の設定を行い記述することとした。

第6章において提示したものは、そのまま教室に持ち込まれて学習・指導の対象とされるようなものではなく、先にも述べたように、あくまでも学習者の自律学習と教師の指導を支援するためのものである。いわば、オノマトペ学習のためのハンドブックとして、利用されることを期したものとして理解されたい。

今後は、より高いレベルでの学習や指導に向けて、語を選定しリソース化を行なっていきたいと考える。なお、このリソース化の一部は、国立国語研究所が行っている e-Japan 事業のインターネットサイト、「日本語を楽しむ―表現豊かな擬音語・擬態語―」

<http://jweb.kokken.go.jp/gitaigo/index.html> において平成 16 年度より公開中である。サイトを見た学習者また教師から様々なフィードバックを得ることができ、またその学習や指導の一助となることができるなら、研究者としてまた現場の教師として望外の喜びである。

筆者が、日本語オノマトペをその研究の対象とし、日本語教育におけるオノマトペ学習と指導のために本論文を執筆しようと思ったのは、日本語オノマトペそのものの魅力にとりつかれたからにほかならない。日本語の語彙において、オノマトペほど生き生きと臨場感にあふれ、楽しく、ときに面白おかしく、豊かで奥深い表現力をもった語彙はほかにない。その思いを共有する研究者の言葉を最後に紹介して、本論文をとじることにする。

「オノマトペは、本来語のなかで最も表現力が豊かである。オノマトペではない本来語の語彙や、借入語では表現できないような細かいニュアンスの差を区別することができる。発話のなかにあっては、オノマトペの部分が音声的に卓立している。話し手は、無意識にオノマトペの部分にメッセージの中心としての意味を込め、聞き手はその意味を正しく捉えるように反応している。このように日本語においてオノマトペは、意志の伝達という機能的な観点から、話者によって最も重要であると位置づけられていると言える。」(角岡, 2001, p. 67)

謝辞

本論文を提出するにあたって、修士論文執筆の段階から根気強くまた丁寧にご指導・ご助言をくださいました早稲田大学大学院日本語教育研究科川口義一教授、同研究科戸田貴子教授、小宮千鶴子教授、吉岡英幸教授をはじめ、様々なコメントやアドバイスをくださいました先生方に心より感謝申し上げます。また、オノマトペの認知言語学からの考察の部分では、東京大学名誉教授国広哲弥先生に大変貴重なご助言をいただくことができました。あわせて深く感謝申し上げます。

本研究のための資料の収集に際しては、国立国語研究所日本語教育部門第二領域の高橋悦子氏、野村陽子氏の協力を得ました。また、第6章で提示した「基本オノマトペ」のソース化においては、早稲田大学大学院日本語教育研究科の古屋憲章氏、山田京子氏、小西玲子氏、高邑真弓氏、朝日カルチャーセンターの仲真加那美氏に、「会話例」の一部について、その原案を提供していただきました。ここに記して感謝いたします。

参考文献

<書籍>

- I. S. P. ネーション, 吉田晴世・三根浩訳 (2005) 『英語教師のためのボキャブラリー・ラーニング』 松柏社
- 秋元美晴 (2002) 『よくわかる語彙』 アルク
- 阿久津智 (1994) 『絵でわかるぎおんご・ぎたいご: 日本語の表現力が身につくハンドブック』 アルク
- 天野成昭・近藤公久 (2000) 『N T T データベースシリーズ 日本語の語彙特性 第7巻』 三省堂
- 有賀千佳子・大淵裕子・桜木和子・桜木紀子・玉置亜衣子 (2001) 『ことばの意味を教える教師のためのヒント集』 武蔵野書院
- 今村和宏 (1996) 『わざー光る授業への道案内』 アルク
- 大坪併治 (1989) 『擬声語の研究』 明治書院
- 荻原稚賀子 (2006) 『絵でわかる日本語使い分け辞典 1000』 アルク
- 苧阪直行編著 (1999) 『感性のことばを研究する』 新曜社
- 筧壽雄・田守育啓編 (1993) 『オノマトピア: 擬音・擬態語の楽園』 勁草書房
- 門田修平編著 (2003) 『英語のメンタルレキシコン 語彙の獲得・処理・学習』 松柏社
- 工藤真由美 (1999) 『児童生徒に対する日本語教育のための 基本語彙調査』 ひつじ書房
- 国広哲弥 (1997) 『理想の国語辞典』 大修館書店
- 編 (1982) 『日英語比較講座 第4巻 発想と表現』 大修館書店
- 黒川伊保子 (2004) 『怪獣の名はなぜガギグゲゴなのか』 新潮社
- 国立国語研究所 (1980) 『日本人の知識階層における話しことばの実態—語彙表—』
- (1984) 『語彙の研究と教育 (上)』
- (1985) 『語彙の研究と教育 (下)』
- (1984) 『日本語教育のための基本語彙調査』 秀英出版
- (2000) 『日本語基本語彙—文献解題と研究—』
- (2001) 『教育基本語彙の基本的研究—教育基本語彙データベースの作成—』
- (2001) 『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』
- 国立国語研究所編 (1964) 『分類語彙表』 秀英出版

- (2004) 『分類語彙表 増補改訂版』 大日本図書
- 小嶋孝三郎 (1972) 『現代文学とオノマトペ』 桜楓社
- 小松英雄 (1981) 『日本語の音韻 日本語の世界7』 中央公論社
- 専門教育出版編集部テスト課編 (1998) 『改訂 品詞別・A～Dレベル別 1万語語彙分類集』
専門教育出版
- 玉村文郎 (1987) 『NAFL日本語教師養成通信講座7 日本語の語彙・意味』 アルク
- 田守育啓 (1991) 『日本語オノマトペの研究』 神戸商科大学経済研究所
- (2002) 『オノマトペ 擬音・擬態語を楽しむ』 岩波書店
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ (1999) 『オノマトペ：形態と意味』 くろしお出版
- 土居光知 (1933) 『基礎日本語』 六星社
- 富川和代, 永保澄雄・稲垣宏明監修 (1997) 『らくらく覚えてどンドン使おう 絵で学ぶ擬
音語・擬態語カード』 スリーエーネットワーク
- 日本語教育誤用例研究会, 佐治圭三監修, 福島泰正編 (1997) 『類似表現の使い分けと指導
法』 アルク
- 日向茂男監修, 尚学図書・言語研究所編 (1991) 『擬音語・擬態語の読本』 小学館
- 日向茂男・日比谷潤子 (1989) 『外国人のための日本語 例文・問題シリーズ 14 擬音語・
擬態語』 荒竹出版
- フェアリンデン・トム (2002) 『わくわく英語フォトブック—擬音語・擬態語—』 情報セン
ター出版局
- 文化庁文化語部国語課 (1983) 『外国人に対する日本語教育の振興に関する報告集』
- 増田アヤ子 (1993) 『ニュアンスがわかる擬声語・擬態語(上級)』 専門教育出版
- 森田良行 (1996) 『意味分析の方法—理論と実践—』 ひつじ書房
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』 くろしお出版
- 山本弘子 (1993) 『音とイメージでたのしくおぼえる擬声語・擬態語(初・中級)』 専門教育
出版
- Kazuo Tsuda, Masatoshi Shimano, Geraldine Carter, and Horomi Yamashita. (2000)
Kisetsu; Haruichiban. Kisetsu Educational Group.
- Nation, I.S.P. (2001) *Learning Vocabulary in another Language.* Cambridge University
Press.
- Neustpny, J.V. (1977) *A Classified List of Basic Japanese. 3rd. Printing.* Monash

University. Department of Japanese.

Senko K. Maynard. (1990) *An Introduction to Japanese Grammar and Communication Strategies*. The Japan Times.

Shoko Hamano. (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. くろしお出版

Taylor John. (2003) *Linguistic Categorization*. Oxford University Press.

<辞書・事典>

浅野鶴子編，金田一春彦解説（1978）『擬音語・擬態語辞典』角川書店

阿刀田稔子，星野和子（1995）『擬音語・擬態語使い方辞典：正しい意味と用法がすぐわかる』創拓社

天沼寧編（1974）『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版

アンドルー・チャン（1990）『<和英>擬態語・擬音語分類用法辞典』大修館書店

尾野秀一 編著（1984）『日英擬音・擬態語活用辞典』北星堂書店

北原保雄ほか編（1981）『日本文法事典』有精堂出版

小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹編（1989）『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店

五味太郎（1989）『英語人と日本語人のための日本語擬態語辞典』ジャパントイズム

島本基編（1992）『日本語学習者のための 副詞用例辞典』凡人社

秀文インターナショナル（1990）『コウビルド英語学習辞典』

白石大二編（1982）『擬声語擬態語慣用句辞典』東京堂出版

辻幸夫編（2001）『ことばの認知科学事典』大修館書店

田忠魁・泉原省二・金相順（1998）『日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する 類義語使い分け辞典』研究社

日本語教育学会編（2005）『新版 日本語教育事典』大修館書店

野村雅昭・小池清治編（1992）『日本語事典』東京堂出版

林巨樹監修（2001）『現代国語例解辞典 第三版』小学館

飛田良文・浅田秀子（2002）『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版

—————・—————（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版

文化庁（1990）『外国人のための 基本語用例辞典（第三版）』文化庁

- 牧野成一・筒井通雄(1989)『日本語基本文法辞典』ジャパンタイムズ
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- 山口仲美(2003)『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』講談社
- Takehi Hisao, Lawrence Schorup and Ikuhiro Tamori. (1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese. Trends in Linguistics. Documentation 12*. Mouton de Gruyter.

<論文>

- 阿刀田稔子・星野和子(1989)「日本語教材としての音象徴語」『日本語教育』68号
- 泉邦寿(1976)「擬声語・擬態語の特質」『日本語講座4 日本語の語彙と表現』大修館書店
- 伊藤理英(2002)「オノマトペに関する考察—擬音語と擬態語間の共感的比喩表現について—」『日本エドワード・サピア協会 研究年報』16
- (2005a)「古代～中世の『～メク』におけるオノマトペの比喩による意味拡張について」『日本エドワード・サピア協会 研究年報』19
- 大澤(伊藤)理英(2006)「オノマトペにおける～スル形の考察」『日本認知言語学会論文集』第6巻
- 大谷洋子(1989)「擬態語の特徴」『日本語教育』68号
- 生越まり子(1989)「日本語の擬音・擬態語教授上の問題」『日本語教育』68号
- 甲斐睦朗(2002)「現代日本語の基本語彙」『現代日本語講座 第4巻 語彙』明治書院
- 加藤和夫(2001)「道がキンカンナマナマやじー——北陸方言のオノマトペ」『月刊言語』30-9 大修館書店
- 加藤久雄・坂口昌子(1996)「後接成分とオノマトペの性質について」『奈良教育大学紀要』第45巻第1号
- 加藤扶久美(1999)「日本語教育における擬音語・擬態語の基本語選定の試み」『富山大学教育実践研究指導センター紀要』No. 16
- 角岡賢一(2001)「日本語オノマトペ語彙派生過程における語基」『竜谷大学国際センター研究年報』第10号
- (2002)「日本語オノマトペ語彙の接辞」『竜谷大学国際センター研究年報』第11号

- (2003)「日本語オノマトペの多義性について」『竜谷大学国際センター研究年報』第12号
- (2004)「日本語オノマトペ語彙の語源について」『竜谷大学国際センター研究年報』第13号
- 金庭久美子・川村よし子 (2006)「日本語学習者のための電子辞書編纂一語の選定と意味の提示順序」『日本語教育方法研究会誌』Vol.13 No.1
- 川口義一 (1996)「日本語指導の文脈化」『日本語教育異文化間コミュニケーション』北海道国際交流センター
- 関西中国語オノマトペ研究会 (笥壽雄監修, 張勤, 豊春楊, 張静萱, 角岡賢一) (1994)「〔中国〕オノマトペ歳時記」『月刊言語』23-1~12 大修館書店
- 金慕箴 (1989)「中国における日本語の擬音語・擬態語教育について」『日本語教育』68号
- 金田一春彦 (1978)「擬音語・擬態語概説」(浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』1978所収) 角川書店
- 工藤 浩 (1983)「程度副詞をめぐる」『副用語の研究』明治書院
- 国広哲弥 (1985)「認知と表現」『言語研究』第88号 日本言語学会
- (1986)「語義研究の問題点—多義語を中心として—」『日本語学』9月号 vol. 5 明治書院
- (1989)「五感をあらわす語彙—共感覚比喩的体系」『月刊言語』18-11 大修館書店
- (1994)「認知的多義論—現象素の提唱—」『言語研究』第106号 日本言語学会
- (2005)「日本語の語彙」『日本語教師養成講座 講義レジュメ』朝日カルチャーセンター
- 窪田富男 (1988)「基本語・基礎語」『講座 日本語と日本語教育6 日本語の語彙・意味(上)』明治書院
- 倉持保男 (1986)「日本語教育における類義語の指導」『日本語学』9月号 vol. 5 明治書院
- 小林英夫 (1933)「國語象徴音の研究」『文学』第一卷第八号 岩波書店
- (1965)「擬音語と擬容語」『言語生活』171号 筑摩書房
- 坂口昌子 (1995)「教科書に見えるオノマトペ」『奈良教育大学 国文 研究と教育』第18号

- 佐久間鼎 (1959) 「意味と音韻」『日本語の言語理論』恒星社厚生閣
- 佐藤武義 (2002) 「語と語彙構造」『現代日本語講座 第4巻 語彙』明治書院
- 鈴木泰 (1979) 「情態副詞の性質についての小見」『山形大学紀要・人文科学』9-3
- 鈴木雅子 (1973) 「<資料1>擬声語・擬態語一覧」『品詞別 日本文法講座10 品詞論の周辺』明治書院
- (1984) 「6擬声語・擬態語」『研究資料日本文法4』明治書院
- 鷺見幸美 (1996) 「「擬音語・擬態語+する」動詞の分類」『名古屋大学人文科学研究』25
名古屋大学大学院文学研究科
- 田中彰夫 (1984) 「基本語彙と基本語」『日本語学』通巻16号 (『「日本語学」特集テーマ別
ファイル』(3)語彙I 2005 所収) 明治書院
- 玉村文郎 (1971) 「辞書とオノマトペ」『言語学と日本語問題』くろしお出版
- (1979) 「日本語と中国語における音象徴語」『大谷女子大國文』第九号
- (1984) 「音象徴語の語形 (その1)」『同志社國文学』第24号
- (1989) 「日本語の音象徴語の特徴とその教育」『日本語教育』68号
- (2000) 「有契化と無契化—音象徴語の語形 (その2) —」『日本と中国ことばの
梯 佐治圭三教授古稀記念論文集』くろしお出版
- 田守育啓 (2000) 「日本語オノマトペの『語彙性』および「オノマトペ度」に関する研究」『神
戸商科大学紀要』35
- (2001) 「日本語オノマトペの語形成規則」『月刊言語』30-9 大修館書店
- 築島謙三 (1941) 「邦語における擬声語・擬態語の象徴性について」『心理學研究』第16 岩
波書店
- 津田和男 (2003) 「教科を超えた米での中等日本語教育の実験」『ヨーロッパ日本語教育』7
ヨーロッパ日本語教師会
- 張勤 (2001) 「会うとティンティンカンティンカンして終わりがいいんだよ—中国語
のオノマトペ」『月刊言語』30-9 大修館書店
- 中尾桂子・白海燕・三上京子・湯浅章子 (2002) 「「擬音語」と「擬態語」の境界と認識の
差異—インドネシア語・朝鮮語・日本語の対照から見たオノマトペ—」『K L S 23
Proceedings of the twenty-seventh annual Meeting』Kansai Linguistic Society
- 中野てい子・仁科喜久子 (2006) 「副詞・述語の共起表現提示のための基礎研究 —日本
語作文支援システムのための調査—」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 13 No. 1

- 中道真木男（1991）「副詞の用法分類—基準と実例—」『副詞の意味と用法』国立国語研究所
- 仲本康一郎他（2004）「予期的認知と形容表現：不安に基づく状況把握」『日本認知言語学会論文集』第4巻
- 西尾寅弥（1981）「「擬音語・擬態語」＋する」の形式について」『語学と文学』20 群馬大学語文学会
- 仁田義雄（1983）「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』第2巻第10号 明治書院
- 野田時寛（1987）「擬音語・擬態語の意味と用法の関係について—「基本語用例辞典」の2000語による小調査—」『日本語学校論集』14 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- 野間秀樹（2001）「オノマトペと音象徴」『月刊言語』30－9 大修館書店
- （1998）「最もオノマトペが豊富な語（特集KOTOB Aのオリンピック——19競技による「ことばの祭典」）」『月刊言語』27－5 大修館書店
- 畠 郁（1991）「副詞論の系譜」『副詞の意味と用法』国立国語研究所
- 林四郎（1984）「私の基本語彙論」『国語学』通巻16号（『「日本語学」特集テーマ別ファイル(3)語彙I』2005 所収）明治書院
- 日向茂男・笹目実（1999）「語形からみた擬音語・擬態語2」『東京学芸大学紀要第2部門人文科学50』
- 姫野昌子（2005）「音象徴語の機能と用法」『言語文化研究Ⅲ 現代日本語の様相』放送大学教育振興会
- 関 祇英（2000）「擬音語・擬態語の習得に関する試み（その1）示差的特徴を用いた意味分析」『表現と創造』名古屋大学大学院人間情報学研究科 巻号：1
- 星野和子（1991）「擬態語の用法—構文論の観点から—」『講座日本語教育』26 早稲田大学
- 細川英雄（1993）「語音構造から意味・用法へ—二音組み合わせ構造のオノマトペ分析から—」『近代語研究』第9集 武蔵野書院
- 堀井令以知（1986）「擬音語・擬態語の言語学」『日本語学』第5巻第7号 明治書院
- 牧野成一（1999）「音と意味の関係は日本語では有縁か」『言語学と日本語教育』くろしお出版

- 三上京子 (2002) 「日本語オノマトペ指導に関する研究」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 9
No. 2
- (2003 a) 「日本語教育におけるオノマトペ指導の現状との方策—日本語教育基本オノマトペの選定とその指導への試み—」早稲田大学大学院日本語教育研究科 修士論文 (未公刊)
- (2003 b) 「上級教材に見られるオノマトペ—統語的特徴の分析と指導の観点—」『早稲田大学日本語教育研究』第2号
- (2003 c) 「日本語教育におけるオノマトペ指導の現状と方策」『ヨーロッパ日本語教育』7 ヨーロッパ日本語教師会
- (2004) 「多義オノマトペの意味・用法の記述と指導の試み—「ごろごろ」「ばたばた」を例として—」『小出記念日本語教育研究会論文集』12
- (2005) 「初級から教えるオノマトペ—基本オノマトペの選定とその教材開発に向けて—」『ヨーロッパ日本語教育』9 ヨーロッパ日本語教師会
- (2006) 「日本語の擬音語・擬態語における意味の拡張—痕跡的認知の観点から—」『日語日文学研究』第57号1巻 韓国日語日文学會
- (2007) 「日本語教育のための基本オノマトペの選定とその教材化」『ICU日本語教育研究』3 (印刷中)
- 武藤彩加 (2000) 「感覚間の意味転用」を支える「メタファー」と「メトニミー」—「共感的比喩」とは何か—『ことばの科学』第13号 名古屋大学言語文化部言語文化研究会
- 山口仲美 (1986) 「古典の擬声語・擬態語—掛詞式の用法を中心に」『日本語学』第5巻第7号 明治書院
- 湯沢幸吉郎 (1931) 「擬声語の収集」『国語教育』10 (湯沢幸吉郎 (1943) 『国語史概説』所収) 八木書店
- 呂佳蓉 (2004) 「比喩としてのオノマトペ—「ころころ」と「圓滾滾」—」『日本認知言語学会論文集』第4巻
- (2006) 「Symbolic View 再考—オノマトペに見た言語の象徴性」『日本認知言語学会論文集』第6巻
- 渡邊裕子 (1997) 「日本語教育におけるオノマトペの扱いについての—考察」『学校教育学研究』第9巻 兵庫教育大学 学校教育研究センター

Leanne Hinton, Johanna Nicholas, and John Ohala. (1994) Introduction:
sound-symbolic processes. In *Sound symbolism*. Cambridge University Press.
Shoko Hamano. (1994) Palatalization in Japanese sound symbolism. In *Sound
symbolism*. Cambridge University Press.

<オノマトペ出現のデータとした資料>

国立国語研究所 (2006) 「現代雑誌 200 万字言語調査語彙表 公開版」

<http://www2.kokken.go.jp/goityosa/index.html>

シナリオ作家協会 年鑑代表シナリオ集編纂委員会 (2003) 『'02 年鑑代表シナリオ集』シ
ナリオ作家協会

富山大学ドラえもん学コロキウム 「『ドラえもん』(短編 45 巻) の擬音語・擬態語」

<http://www.inf.toyama-u.ac.jp/doraemon/index.html>

日本脚本家連盟編著 (2004) 『テレビドラマ代表作選集 2003 年度版』日本脚本家連盟協同
組合